

パネルディスカッショն



パネルディスカッション会場①

コーディネーター紹介

佐藤信（さとう まこと）

日本古代史専門。東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了後、奈良国立文化財研究所研究員、文化庁文化財調査官、聖心女子大学文学部助教授、東京大学文学部教授を経て、現在、東京大学大学院人文社会系研究科教授

パネラー

明治大学文学部教授 吉村 武彦

九州歴史資料館学芸調査室長 小田 和利

東洋大学文学部教授 森公章

熊本県教育委員会 矢野 裕介

司会：これより、コーディネーターの佐藤様に、「律令国家の確立と鞠智城／六九八年「縛治」の実像を探る」というテーマで、四名のパネリストの皆様によるパネルディスカッションを進行していただきたいたいと思います。それでは、佐藤様、よろしくお願ひします。

佐藤

・よろしくお願ひします。本日のシンポジウムは、一〇時半から、熊本県の蒲島知事さんのお話から始まり、矢野さんの調査経過の報告、吉村さんの基調講演、それから午後に入つて、小田さんの大宰府と関連した講演、森さんの「縛治」の歴史的背景に関する講演でした。ずいぶん皆様もお疲れかと思ひますが、これから約一時間半ほど、パネルディスカッションを行いたいと思ひます。どうぞよろしくお願ひします。

佐藤 氏
今日は、「律令国家の確立と鞠智城」というテーマなのですが、副題に「六九八年の縛治の実像を探る」ということで、かなり専門的なところに踏み込んで、テーマを設定させていただきましたが、皆様、これまでのお話を聞いていただきたい、いかがでしたでしょうか。私などは、鞠智城をめぐつていろいろな歴史像が考えられるなあと、大変興味深く聞いていました。これまでの鞠智城に関するいくつかのシンポジウム、去年も東京・大阪でシンポジウムがありましたし、それ以前にも東京でありましたが、それらシンポジ

ウムに参加いただいた方には、かなり親しみをもつて聞いていただいたかもしませんが、初めて聞かれた方にとっては、すぐに「繕治」といわれても、具体的にどういう繕治なのかというところがあるかもしれません。

私なりに少し考えてみると、まず律令国家の成立ということが古代史の中でどういう意味を持つのかというと、とても大きな意味があると思います。主に七世紀中ごろから後半にかけて、律令国家の形成という経過があり、最終的に私どもは、大宝律令で確立したというようになります。その過程では、六四五五年には乙巳の変が起きて、蘇我氏の本宗家が滅ぼされ、孝徳天皇の時代にいわゆる大化の革新の政策が行われ、六六三年には白村江の戦いの大敗北があり、日本列島で国家的な集中を図らなければいけないという事情があつたと思います。

それから、今日のお話にあつた大野城・基肄城の造営などがあり、鞠智城の造営もその直後であります。六七二年には壬申の乱があり、それを受けた形で、天武天皇・持統天皇の時代に律令制の制定だとか、古代の都城の形成だとか、様々な事業が行われるようになつて、六八九年に飛鳥淨御原令という令ができる。六九八年に今日話題にしている大野城・基肄城・鞠智城の繕治ということがあり、七〇一年に大宝律令が確立するということです。

その間、六六八年に高句麗が滅亡してすぐに倭から遣唐使が行くのですが、その後、七〇一年に任命した遣唐使まで約三〇年間、日本から遣唐使は中国へ渡つていません。その間は、新羅との関係で

大陸・半島の情報を得たと思いますが、七〇一年に任命した遣唐使が翌年中国に渡った時に、初めて「日本」という国号を称して唐の皇帝とまみえるということが行われる。ということで、この段階で大きく日本列島における律令国家形成という歯車がどんどん回っていくという、急激な変化があつたと私は思っています。

白村江の戦いの時の倭の軍勢は、ほとんど地方豪族軍の寄せ集めのような軍勢であつたといわれています。ところがその地方豪族たちは、大宝律令、律令制のもとでは、地方の郡の郡司になるということですね。元は、七世紀半ば以前、國造(くわうぞう)と呼ばれるような、地方のそれぞれ「君」(きみ)として、一国一城の主的な立場から、律令制、官僚制のもとでは、国司の下に位置づけられる地方官の郡司として任命される、そういう形になつていく。大きな変化であつたと言つていいと思います。

その過程で、鞠智城の築城が行われ、六九八年に「繕治」というものが行われる。その時代がちょうど、律令国家の確立過程、中央政府が北や南に版図を広げる過程でもあり、そういう展開とどうリンクするのか。対外的にも、白村江の敗戦や、先ほど申した三〇年ぶりの遣唐使の派遣も含めて、アジア的な規模での様々な動きがある。日本列島の中でも、辺境における動きも絡む中で、中国の唐を真似して、律令制に基づく中央集権的な国家を築いていく。律令など先進文明の情報は新羅經由でも入ってきていたということだと思います。こうした過程は、私達古代史を学ぶ者は、具体的にどう変わつていったのかに非常に関心があるわけです。その過程の中で、六六三年以後の鞠智城築城や、

六九八年の繕治が、どのようにはまつていくかということです。日本列島全体の歴史、アジア全体の歴史の中で、どう位置づけられるかということになつていくかと思います。

このように、私なりの今日のシンポジウムテーマの背景を話した上で、以下に、三つのテーマを決めて、パネリストの先生方にお話を伺つていきたいと思つております。

一番目は、鞠智城の築城をめぐる、築城の目的。二番目は、「鞠智城繕治を探る」というテーマにしたいのです。私は、築城と繕治の違いを際立たせて考えるという方向が有り得ると考えています。

例えば、矢野さんやそのほかの先生方のお話にもありましたが、鞠智城で最も多くの土器が出土する時期というのが、繕治の時期なのです。築城の時に最も多くの民衆を動員して、その時に多くの食器を使つたりして、土器が多く出土するということだつたら分かるのですが、その時よりはるかに大量的の土器が出土するということで、この鞠智城で最も多くの人々が活動していた時期がこの繕治の時期です。その後八世紀半ばになると、ほとんど少なくなつてしまふ。そういうことをどう理解するかというとき、二番目の繕治のテーマでも探るのですが、それでは築城の時はどうだつたのかということにもなるかと思います。それから三番目のテーマは、鞠智城の役割とその変化ということで、これはまた先生方に鞠智城をどう捉えるかということについて、それぞれご意見を伺いたいと思つています。

ということで、まず初めに、鞠智城の築城をめぐって、その目的は何かということについて、これ

まで鞠智城を調査され、報告書を作られてきた、矢野さんにお話を伺いたいと思います。矢野さんは今日ご報告の時間が短かつたので、それを補う内容も含めて、少しお話を聞いていただきたいと思います。お願いします。

矢野

・鞠智城跡の発掘調査は、昭和四二年から始まり、現在三三次を数えます。これだけ長く調査をしていますので、古代山城の中では最も調査が進んでいるものと考えています。先ほどの報告の中では言い尽くせなかつた部分を少しご報告させていただきます。

鞠智城の創建期については、基本的に城としての機能を揃える必要があるということから、防衛ラインである土壘・城門などの外郭施設の整備が優先されたものと考えています。

各遺構を見ていくと、深迫、堀切、池ノ尾という三カ所で確認されている城門は、すべて古いタイプの掘立柱の城門で、土壘を見ても、天智四（六六五）年に築城された大野城と非常に似た造りをしています。こうした遺構の特徴から、白村江の敗戦直後から、外郭施設を急速に整備していくたということが分かります。その一方で、城内の施設、掘立柱の建物は、次の鞠智城Ⅱ期の施設に比べて小規模なものが多いということが特徴として挙げられます。このことから、城の外郭施設はきつちり造り上げようとする一方、城内の施設、倉庫とか兵舎とかは、ひとまず応急的に整備したものと考えられます。出土土器においても、鞠智城Ⅱ期にあたる土器は、鞠智城の中でも最も多く見つかっ

ていますが、その一方で、鞠智城Ⅰ期の土器というのは数少なく、限られた量しか出土していません。

そうしたことから、鞠智城Ⅰ期というのは、とにかく唐・新羅が侵攻してくるにあたって、国家防衛網を構築していく中、早急にこの地に城を築かなければいけないという考え方のもと城が造られた段階と思っているところです。

また、鞠智城の築城に関しては、残念ながら文献の記録が無く、この年に確實に造ったということは言えない状況にあります。ただ、鞠智城「繕治」の時期に同時に繕治した、大野城・基肄城とほぼ同時期、あるいはやや遅れた時期に築かれたということは、ほぼ言えるのではないかなと思っています。

佐藤：はい。唐・新羅に対する国家防衛網として創建が急がれたというお話ですが、その際、やはり鞠智城

の場所が熊本県の北部の、有明海からやや内陸に入つた菊池川沿いの地にあるということですが、その場所で国際的な危機感とどう結びつくかということに関して、矢野さん、もう少し補足していただけないでしょうか？

矢野：鞠智城の場所というのが、菊池川の有明海河口から直線距離で三〇キロメートル内陸に位置しているのですが、三〇キロメートル位だから、海が見通せるのではないかと思われるかもしれません、手前に低い丘陵が連なつておりますし、残念ながら有明海を見通すことができません。

ただ、車路くるじという地名が、熊本県の北部にところどころ残つております。それをつなげるような形で、鞠智城の近くに、当時の主要道路となる古代官道のラインが想定されています。九世紀に編纂された『延喜式』に、大水、江田、高原、蚕養、球磨といった駅家の名前が見え、その候補地が熊本県の西の方、九州縦貫道沿いにあることから、平安時代の古代官道は九州縦貫道沿いのラインが想定されていますが、鞠智城が築城された当時は、東の方に回つて、鞠智城の近くを古代官道が通つていたものと考えられています。

現在でもそうなんですが、鞠智城がまたがる菊池市中心部は、熊本市に向かう道、福岡県南部に向かう道、大分県の日田市に向かう道、それと、阿蘇に向かう道が交わり、いわゆる交通の要衝で、古代においても同じことがいえ、そうしたことでも、鞠智城がこの地に築かれた、一つの経緯だらうと考えています。

おそらく築城当初から、南の有明海、八代海を経由して、そこで上陸した外敵が道伝いに北へ侵攻してくる経路の、ちょうど正面に鞠智城が位置し、南から侵攻してくる敵を、迎え撃つ役割があったのではないかと考えています。大宰府に物資や食糧を供給する後方支援の役割というのも当然あったと思いますが、その一方では、南からの敵を迎え撃つ南の防衛拠点であつたと考えているところです。

佐藤：古代の文献を見ましても、有明海に外国人がたびたびやって来るという記事はよくあります。九世

紀でも、新羅からの遣唐使がここに漂着したという記事もあり、九世紀に新羅と日本の国際関係が緊張した時に、鞠智城がまたクローズアップしてくるという事情もあります。また、肥後の地方豪族の肥君、葦北君の一員が、七世紀の半ばに、百濟の国の顧問のような地位になって、日本と百濟との外交関係上で活躍するというような話もあります。この有明海沿い、肥後国というのは、アジアに向かって開かれた土地であつたということは、文献のほうからも言えるのではないかと思います。

そういった対外的なことも含めて注目したいのが、大宰府の存在です。「繕治」の主体である中央政府が、大宰府をして三つの城を繕治させたという記事であります。大野城・基肄城の場合は、百濟から亡命してきた貴族を派遣して築城するのですが、それに準ずるような形で鞠智城も築城が行われたと思われているわけですが、小田さん、その大宰府との関連で、鞠智城築城の目的に関してもお話しいただけないでしょうか？

小田：その前に、大宰府の最初の建物ですね。いま整備されているのはⅢ期といつてある一〇世紀後半の建物ですが、一番下層にⅠ期といつてある時期の建物が存在します。このⅠ期といつても、年代的には白村江の戦いに敗れた直後の建物と見られていますが、Ⅰ期でも古段階と新段階がありまして、Ⅰ期の古段階というのが白村江の戦いの直後くらい。新段階といつても七世紀の第4四半期の前半と後半に分かれています。Ⅱ期の造営段階というのが直前にありますて、それから礎石の建物に変わり

ます。

そういった建物の変遷が確認されていますが、その最初のⅠ期の建物をどう見るかというのも実はあります。といいますのが、Ⅰ期の古段階を白村江の戦いの後にこの場所に移ってきたかどうかといつた問題が出てきます。それから、水城であるとか、大野城、基肄城であるとか、それが立地する場所とこの政府の場所といいますか、Ⅰ期の大宰府との関係が少し問題になってしまいます。

個人的な意見を述べさせていただくと、私の説明の中でも少し触れましたが、水城を育明天皇に絡めて考えていることがあります。朝倉宮を守るために当初の水城を築いて、その後の六六四年の段階で、後の大宰府になっていくⅠ期の大宰府といいますか、それを守るということで二段階の造営を実は考えています。当時は朝倉宮を守るということで水城が存在して、その後に大野城・基肄城が造られて、Ⅰ期の大宰府、那津屯倉から移ってきたともいわれていますが、私は磐瀬宮の機能がⅠ期の大宰府に関連していると見ているのですが、そういったことで、次の第Ⅱ期の政庁になつていく施設、それを防御するという意味で、大野城と基肄城が存在すると考えています。それと、先ほどから有明海の話が出ていますが、朝倉宮というのを朝倉市杷木町の志波地区に想定していますが、筑後平野の一番南東の左翼部に位置します。その前面に筑後川という川が流れています。それが有明海に注いでいるわけですね。一つの逃げ道として、豊後に抜けるいわゆる豊後道といっているものを利用し、それから船を通じて、瀬戸内の方に入っていく。もしくは四国の南から入るルートが考えられます。有明海

のルートを考えたときに、やはり、年代的なことはあるかと思いますが、鞠智城の存在はとても重要なものになつてくるのではないかなと思います。

佐藤：今のお話に出てきた、大宰府と鞠智城をリンクさせて考えるときに、先ほど、矢野さんのお話にあつたように、鞠智城の場合、築城期と繕治期とでは、繕治期のほうが施設などが充実するというお話をがありました。大宰府の場合も、七世紀の白村江の戦い直後の段階というのがまだ本格的なものではないという点では似ているのかもしれません。六九八年の鞠智城繕治の時期よりももう少し後の、太宰府II期の八世紀前半の段階で、大宰府自身は朝堂院形式の礎石建ちの建物になつて、藤原純友の乱で焼けた後にもう一度利用したIII期の礎石が今も「都府楼」に残つているということだと思います。そのオリジナルとなる、立派な礎石で立派な建物が築かれたのが、八世紀前半のII期であるという解釈だつたと思いますが、その年代的な差はどう考えたらよいか、何か意見はありますか。

小田：II期というのが、年代の決め手としているのが、南門であるとか、中門であるとか、瓦葺の礎石の建物に造り替えたときに、地鎮符といって、今でも家を建てる時に地鎮祭などを行いますが、その際に土器を埋めているんですね。基壇の下部といいますか。そこに入れて、建物が火事などに遭いませんようにとか、そんな祈念の意味で土器を入れます。その土器が、南門・中門の基壇から出ています。

その土器の年代を八世紀の初頭あたりに置いているわけですね。それと、瓦葺の建物ですが、政庁の場合は鴻臚館式という瓦が使われますが、そういうふた瓦の年代であるとか、土器の年代であるとか、そういうふたものから八世紀の前半と年代を置いているわけです。

先ほどの六九八年の大野城、基肄城、鞠智城の繕治記事は七世紀末ですが、大野城などは、水城もそうですが、政庁のⅡ期になつて、瓦葺の城門に建て替えられます。その年代からしても、少し、数十年の齟齬が生じるわけですが、繕治があつて、その後すぐに瓦葺の建物に替わつているということになります。実は、そこらへんが、遺構上では確認されないという状況はあります。今回、鞠智城が「繕治」ということで取り上げられていますが、大野城・基肄城についても、「繕治」についてもう一度考え方があると思つています。



パネルディスカッション会場②

佐藤：そうですね、大野城が瓦葺で立派になるのが、Ⅱ期で八世紀前半くらいというのが、今の段階での考古学的な知見だとということですね。基肄城はまだそこまで研究が進んでいないことだと思います。鞠智城では近年かなり発掘が進みましたので、この「繕治」という時期に何があつたのかが話題にできるようになったわけですが、これはやはり大宰府、そして大野城・基肄城の調査・研究が進めば、時代のズレがどうなるのか、あるいはそれぞれの性格、あるいは順番がどうだったかということも含めて、それから、周りの城の修理を先にしてから大宰府本体がリニューアルするのかどうかということも含めて、これまでの話を踏まえた上で、鞠智城築城をめぐる問題について、吉村さんにお願いしたいのですが。

吉村：この四、五年でしようか、一般の市民の方と『日本書紀』の天智天皇紀と天武天皇紀を読んでいます。かつては同時代的な史料がないと危ないといわれていましたが、今は天武紀に入つて三、四年目くらいになりますが、最近話題になつた「白錦後苑」、飛鳥時代の庭園、苑池遺構なのですが、どうも事実と符号するような、つまり、『日本書紀』に、実際に飛鳥で展開していたような記録が認められます。ですから、『日本書紀』を実際にどう読むか、実は、明治大学には、『日本書紀』は編纂した時のこと実であつて、歴史として読むのはけしからんという、そういう方もおられますので、いつも緊

張感を持ちながら読むのですが、今、問題になつてゐる『天智紀』の場合も、長門国に城、筑紫国に大野・櫟の二城を築くと、いうのがあります。

文献のほうからすると、もう一つ問題になるのは、例えば武藏国とか、下総国、上総国、こういう令制の、大宝律令制度の国がいつできるのか。普通は天智朝にできるのではないかとされていますが、筑紫国ということですから、当時の国境線が変わつていないとすると、大野城は筑前、基肄城が肥前になりますよね。ですから、もともと国境線をまたいで大宰府を造るということなのか、いやそうでなく、大宰府を造つてから後に国境線を引いたのか、ここも大きな問題かと思います。

いずれにしても、筑紫国ですから、後の筑前・肥前に分かれますから、結局それぞれの国で築城するというのは、僕は難しいと思うんですね。ですから、ただ筑紫国と書いてあるのだと思います。七世紀の後半には、森さんも言われましたが、総領・大宰というのと、くわくとも國宰の二つの制度があつて、奈良時代になつてから他の大宰・総領が無くなり、筑紫のみ残ります。天智六年になると、大和国高安城、讃岐国山田郡屋嶋城、対馬国金田城など、かなり令制国があるよう書かれていますが、最初の段階から大野・基肄城を含めて大宰府を造つていくという姿勢があつたものと思います。ここに鞠智城が入つていなさいということは、阿志岐城がいつできたかもよく分かりませんが、いわゆる神籠石系の山城も結構ありますので、必ずしも明白に意図されていなかつたのかもしれない。ただ、その後の段階になりますと、これは「大宰府をして」と書いてありますから、筑紫ではなくて、同じ七世紀

末でも大宰府云々と書かれていますが、それをどう意味するかということです。

それから、鞠智城に関しては、大宰府というと私たちは北を見て考えることが多いと思うのですが、今でいうと福岡とか佐賀になりますが、先ほど佐藤さんが言われましたように、例えば、肥後の国には、日羅という、倭人でありながら、百濟に行つて官僚になる人が出てきておりまますし、菊池川流域というのはかなり装飾古墳があるところで、これはやはり朝鮮半島との影響を考えていかなければいけません。私が最初に装飾古墳を見に行つた時に、船に馬が乗つていて、天文現象が書かれているよう、そんな装飾古墳もありまして、結局、この熊本の肥後という国と、先ほど佐藤さんが言われましたように、対東アジアといいますか、朝鮮諸国ですね。そこでの交流というのはすごいものがあつたのではないかと思います。そういう意味で、博多湾向けど、有明海、あるいは八代海ということになるかもしれません、鞠智城は、大宰府の後方支援になりつつ、かつ、有明海・八代海を睨んだといいうような面が、築城当時にあつてもおかしくないのではないかと思つています。

それから、大宰府は、よく百濟の扶余と比較されますが、ただ扶余は、河川が曲がりながら流れています、その真ん中にあるのですが、これもよく考えると、扶余で敗退して、同じようなものを大宰府に造るというのは少し考え方づらい。むしろ百濟の扶余の経験を積んで、大宰府を造ると。ですから、今日ご紹介がありました、阿部義平さんの、羅城的なものも一つは非常に参考になるというか、あれは扶余の形とは違いますよね。扶余も、外郭は確かに山で囲つているのですが、内郭的なものはちよつ

と様子が違うのではないかと思います。ですから、扶余との比較もいいのですが、百済は負けたという意味で、負けた人が日本列島にやってきて指導するわけですから、やはり負けない城づくりのものも考えたほうがいいのではないかと思つています。

そういうところで、何か一つの目的というよりも、結局、白村江の戦い以降の西海道をどう守るかという、そういうレベルで考えていくと、やはり北の博多湾の問題、それからちょっと肥後国になりますけれども、有明海、あるいは八代海とかを睨んだところで、大宰府とも関係がありますし、築城当初は南の方との関係は分かりませんが、南との展開を意識するというよりも、有明海、もしそちらでやられたらどうするかということがあるかと思います。もちろん「繕治」の段階では、この天智朝ではありますましたが、何かそういうものができていても、同じところに国府と別のものを作るとは考えづらいものがあります。ですから、やはり菊池川流域をおさえるということの意味、これは河川と穀倉地帯というか、そういう兵站基地としての、背後としてはいい場所ではないかと思つています。

佐藤

.. 肥後と朝鮮半島との関係というと、先ほど申し上げた肥後の地方豪族が、百済の高官に昇った人がいるというようなことだけではなくて、吉村さんがおっしゃったように、例えば江田船山古墳で出土した銘文の太刀も有名ですが、一緒に出土した金銅製の武具だとか、装飾品が、百済系ですよね。垣根なく百済と交流していたということだと思います。そういったこともあって、鞠智城を理解するとき

は、もちろん大宰府の後方支援的な性格と同時に、有明海を通した前進基地的な意味合いもあるのでないかと思います。菊池川流域は肥後国最大の穀倉地帯ですので、そこを抑えるという意味もあって、そして菊池川の水運は現在より遙かに使っていたでしようし、有明海がもう少し内側まで及んでいたと思いますので、その距離をあまり大きく見すぎないほうがいいかなと、私はいつも思っています。

国がいつからでききたかというお話もあって、ちょうど先ほど、律令国家の確立過程というのをいろいろな面で検討しなければいけないと言つたのですが、小田さんのお話でも大宰府自身がだんだんとできていくし、吉村さんのお話にあつたような、軍団制とか、それとリンクした戸籍制、民衆把握という律令国家のあり方ですね。あるいは国司制の成立をめぐって、総領・大宰、くわみのいせき國宰のあり方から、律令制的な国司制になっていく段階、その段階をどう捉えていくかということが、鞠智城の理解にも深く関わってくるとあらためて実感しました。

最後になりますが、森さん、築城に絡めてのお話をお願ひします。

森

..やはり有明海方面との関係で言いますと、大宰府の前身となる筑紫大宰、推古朝に一応文献的には出てきて、百済が中国に派遣した使いがいて、それが有明海方面に漂着をして、筑紫大宰を経由して中央に来るという情報が来て、それに対応するという記事もありますから、古くから有明海とのつなが

りですね。さらに遡れば、先ほどの六世紀の倭系の百濟官僚といわれている、肥後の葦北地域を主体とした日羅ですね。もともとお父さんの代に、大伴金村がなんかの命令で百濟に行つたということで、九州の豪族が朝鮮半島で活動しています。さらに五世紀の江田船山古墳というところで関係がありますから、やはり歴史的に、そちらの方についても目配りをしないといけないということは筑紫大宰も分かっていて、有明海方面との関係で、鞠智城は置かれたことがあると思いますね。

それから、吉村さんの話を聞いていて、鞠智城は河口から三〇キロメートルくらいのところですね、昔から何故こんなところに置かれたのかと思つていきました。大宰府との関係ともいわれていますが、先ほど、扶余と大宰府は違うのではないかというお話でしたけれども、扶余というか、泗沘というところですね。錦江の河口からはちょっと遡つたところにあります。つまり山城を造る時、誰がそこを選地するのかという問題を考えたとき、もちろん鞠智城のあたりに城を造るというのは、先ほどの肥後国の歴史的なところがあると思うのですが、百濟系の菩薩像の出土などから見て、大野城・基肄城と同じように、亡命百濟人の技術者が造つたというように思います。そういう選地をする時に、どのあたりに造つたほうがいいかと考えて造つたというのではないのかと。確か、泗沘はかなり河口から遠いと思っていたのですが、大宰府は一〇キロメートルくらいですかね。最初、筑紫大宰は、推古朝のあたりにはたぶん那津官家あづのき家という、博多のあたりにあつたと思いますから、そこから大宰府は二キロメートルくらい下がつたところにあつて、水城がそういうところにできたのは、もう少し何か、百濟

人の防衛構想みたいなものはないのかなあと、少し思いました。

佐藤

…防衛構想として、大河の河口部からは奥に入ったところに扶余という都を、百濟最後の都ですが、嘗んだということですね。今のソウルも、漢江という大河の河口部の仁川よりもちょっと入ったところにあるわけですが、そういった選地に、百濟人の防衛観念が背景にないだろうかということですね。その点について少し、矢野さん、鞠智城における百濟的なものについて、鞠智城の調査成果でこういう点が百濟的ではないかということで、先ほどもご説明があつたと思いますが、版築の仕方だとか、技術的なもの、あるいは菩薩像ですね、百濟で製作されたといわれておりますが、いくつか挙げていただけないでしょうか。

矢野

…鞠智城と百濟の関係を表すような遺構・遺物ですが、一つは先ほどから話題になっています銅造菩薩立像です。これは、七世紀中ごろに百濟で造られたと九州大学名誉教授、大西修也先生からご指導をいただいているところです。

また、土壘については、やはり版築工法、土壘の前面に柱を立て、そこに板を渡して、その板と内側の壁との間に土を入れて棒で突き固め、また土を入れて棒で突き固めてというふうな造り方で確實に造つておりますので、百濟に限定できるのかどうかは分かりませんが、朝鮮半島から伝来してきた

技術により、構築されているということは言えます。

それから、平面形状が八角形の建物跡。これは鞠智城Ⅱ期、鞠智城「繕治」の時期の遺構ですけれども、現在、国内では、大阪の前期難波宮跡や群馬県の三軒家遺跡でも見つかっています。ただし、構造的には違いがあり、前期難波宮跡のものは真ん中の心柱がない構造で、三軒家遺跡のものは、心柱を中心に放射状に回るような柱配置ではなくて、横の並びで八角形を表しています。そうしたことから、双方とも平面的には八角形ですが、上屋構造に違いが認められる建物ではないかと考えています。

類例を求めますと、韓国のソウル近郊に位置する京畿道河南市にある二聖山城で同様の建物跡が見つかっています。鞠智城のものは掘立柱の建物ですが、二聖山城のものは礎石建ちの建物で、真ん中に心柱の礎石を置き、その周りに八角形状に柱を放射状に並べており、構造上非常に似ています。ただ、この二聖山城は、今のところ、出土遺物から新羅の城ではないかといわれています。

最後に、单弁八葉蓮華文軒丸瓦があります。ただ、大野城や大宰府で出土している单弁八葉蓮華文軒丸瓦とは文様の形状に違いがあります。古くから百濟系の瓦といわれてきたのですが、近年では、新羅に系譜を持つ瓦あるいは高句麗の様相を持つ瓦などの見解もあります。

佐藤：韓国のソウル近くの、河南市の二聖山城では、八角形だけではなくて、九角形とか、十二角形の建物

もあり、それから貯水池がやはりありますよね。その点は少し似てるという感じもします。

そこで、次に、二番目のテーマであります、今日のシンポジウムのテーマでもあります、「繕治」ですね。六九八年に『続日本紀』に、大野城、基肄城と鞠智城の三つの城を中央政府が大宰府をして繕治せしむという。繕治が六九八年に行われたということについてどう理解したらよいか。例えば、目的としては、森さんのお話の中には、隼人とか、南島対策という歴史的背景があるのでないかというお話がありましたが、いろいろなことが考えられると思います。

最初に、やはり矢野さんのほうから、「繕治」の時期の調査成果の特徴について、もう一度説明していただけないでしょうか。

矢野：鞠智城Ⅱ期は、鞠智城の変遷における各期の中で、最も城内の施設が充実するということが特徴として挙げられます。城の中心域となる長者原地区の北側にコの字型に配置された建物群、城の中枢施設となる「管理棟的建物群」が出現するというのが大きな特徴になります。さらに、その南に八角形建物や大型の総柱倉庫が配置されるということで、城内の施設が最も充実した時期に位置づけられるのではないかと思っています。それから、この時期の土器が非常に多く出土していることから、城の管理・運営にあたつて、多くの人員を配置したのではないかと考えています。

こうしたことから、鞠智城の繕治というのは、単なる修理や補修のみで捉えられるものではなく、

その修理、補修は、城の役割・機能、そして管理・運営の変化が伴うものだったのではないかと考えておるところです。

佐藤：続きまして、小田さんのほうから。先ほども、大野城・基肄城の繕治についてのこれまでの調査成果についてはお話しいただいたのですが、もう一つ、大宰府が、大野城・基肄城、鞠智城もそれに入れていいただきたいのですが、配下の山城をどのように把握し、支配したのか。城の司といった役所があるのか無いのか、そういうことを含めて、ちょっとお話ををしていただけないでしょうか。それから、

大宰府や大野城・基肄城にとつての、ちょうど六九八年から大宝律令ができるころの時代。これは大宰府にとつても、律令官僚制の確立という意味で影響がある時代だと思うのですが、その点についても触れていただければ幸いです。

小田：先ほど、大野城はよく分からないとお話ししましたが、実は城門跡が、以前は四カ所だったのですが、それが平成一五年の大水害があって、平成一六年から修復の調査をやっていますが、最終的に九つに城門が増えています。

メインとなるのが南側にある大宰府口の城門です。これは大野城が造られた当初からあり、三時期の変遷がありまして、二回ほど城門を建て替えてます。それと宇美口というのがあります。百間石

垣のすぐ横に存在するといわれている城門になるのですが、こちらも川の中からⅡ期とみられる礎石が出ていますので、おそらく当初から何時期かにわたって城門が存在したというふうに見られます。

残りの七カ所の城門なんすけれども、坂本口・水城口については以前から分かつていていたのですが、そのあと、原口・觀世音口、そして北側で、北石垣・小石垣・クロガネ岩というのが新たに見つかりまして、新たに見つかった城門のほとんどが懸門式といつて、城門の底面といいますか、それから一段段差がついています。梯子を架けないと中に入つていけないような構造の門になります。年代的には七世紀後半、細かい時期は何年とははつきり言えないのでですが、そういうた城門が増えていきます。

当初の守りからすると、城門は少ないに越したことはないのですが、今のところ九カ所確認されていまして、場合によつては城門を新たに付け足したのが、繕治の記事に関連づけられるのではないかと思つています。

それから、城の中には七〇棟ほどの倉庫があると申しましたが、当初は掘立柱の建物、それが礎石の倉庫に変わっていきます。二カ所しか城門がなければ、周囲がだいたい六キロメートルほどありますので、ぐるりと三キロメートルほど回る必要が出てくるわけなので、礎石の倉庫を造る際に、入り口となる城門を設けないとロスが大きいといいますか、そういったことと絡んで、城門を新たに増設していく。そういうことが、ある意味「繕治」という記事で表現されているのではないかという気がしています。

それから、大宰府の役割で、大宰府自体、律令のころになりますと、職員が五〇名になります。帥そち

以下、五〇名の職員で大宰府を運営します。実際には臨時職員的な人がいて、二〇〇〇人くらいの人
がいたといわれていますが、その中で大野城司と防人司という役職名で出てきます。大野城司とい
うのはまさしく大野城の運営や管理、そういうことを行う役所だと思いますが、それと防人司です
ね。辺境の防衛・防備にあたつた、そういうものを管理する役所も、大宰府の中に置かれます。ま
た、警固所というのがあります、地名でいうと福岡市の方に警固けいこという地名がありますが、こういっ
た警固所あたりも、外敵からの警護といいますか、そういうものも担つたのではないかともいわれ
ています。そういう役所あたりが、大野城、基肄城、または鞠智城の造営や繕治に関わっていた可
能性は十分考えられるのではないかと思います。

佐藤

..大野城司という役職があり、大野城には大量の稻穀が蓄積されているわけです。古代の山城というの
は、敵が攻めてきたときに、そこへ役人や兵士が民衆と一緒に逃げ込んで、ひたすら守つて、敵の
兵站が尽きて帰つていくのを待つといった戦い方だと思います。実際に高句麗コルという国はそれで隋
の大軍を三度も押し返した歴史的な事実があります。古代の山城はこうした役割を持つており、中
にそういった防衛のための施設と同時に稻穀を収納する米倉がたくさんありますから、それをしつ
かりと守らなければいけないということですね。そういうことも担当し、それから日常的な修理

ももちろん担当したと思いますが、大宰府の役人として、そういうた司が置かれているということです。

筑前国司が管理するのではなくて、大宰府の府官が直接担当するということで、同様なことが基肄城や鞠智城であり得るかということを考える必要があります。先ほどの講演でもありましたとおり、基肄城の場合は、不丁地区から出土した木簡の中に、大宰府の役人が基肄城の米を筑前や筑後、そして肥国、肥国は熊本県を含むわけですが、これら諸国に分配したことが記載されています。つまり基肄城に備蓄されている米は大宰府の役人が管理していることを示す八世紀半ばの木簡が大宰府から出土しています。基肄城にも立派な倉庫が、途中で礎石建ちになる倉庫群があるのですが、その管理は大宰府が直接していたということが、この木簡によつて分かります。後には国司に代わるかもしれません、八世紀半ば段階ではそうです。

鞠智城もそういうことがあります。大宰府の直接管轄なのか、肥後国の管轄なのか。実際には、大宰府からかなり離れておりますので、鞠智城の日常的な管理には、大宰府が関与する部分と、肥後国司が関与する部分と、地元の菊池郡が支える部分があると私は考えています。これは、鞠智城で出土した米につけられた荷札木簡に、「秦人」という名前が出てきていますが、これは国名、郡名が書かれていないので、おそらく菊池郡の人と見て間違いないと思います。いろいろなレベルで鞠智城に関連している組織の人々がいたと見てよいと思います。鞠智城の築城自体は中央政府も関与

して百濟から渡来した貴族たちが関係した場合もあり得ると思います。そういう鞠智城についての直接の史料はあまり無いわけですけれども、大野城の場合は、そういう形で史料が残っているということです。

それから、お話の中の懸門式というのは、高い所に門が造られていて、門を通ろうと思うと、下から梯子か何かで登つて行つて、門を開けて入るという構造です。そこからは、例えば大量の米俵を入れるとか、そういうことにはあまり適していないと思つていいでしようね。

小田：そうですね。防御的な性格が最も強いかと思います。

佐藤：むしろ見せつける門ですよね。敵が攻めてきても、こんな門があつて、立派な施設だと。実用としては、門としての機能はなかなか果たしにくいのではと、私は思っています。その点では、鞠智城ではいくつかの門の構造で、唐居敷の石があり、これまでのシンポジウムでも取り上げていただきました。そういう研究が進めば、その技術の伝来、あるいは大野城・基肄城との城門の構築方法の比較ができるかな、と思っています。

それでは、次に「繕治」について、吉村さんお願ひします。

吉村：このシンポジウムの準備をする時に、まずは、『六国史』における「繕」という言葉の検索をネット上で行つたのですが、二〇カ所ほどヒットしました。実は、朝鮮半島では行政単位でも城が出てきましたが、そこの「繕」というのが出てきましたから、これはなかなか今まで誰も気づいていないことが言えるかなと思ったのですから。『日本書紀』から見ていくと、実は、「繕」という言葉はいろいろ意味で使われていることが分かりました。例えば、武器の修理みたいなものも「繕」。それから「繕写」という公文書も繕い写すというのが出てきまして、かなり一般的な用語だというのが分かりました。

実際に「繕治」が出てくるのは、今日もご報告しましたが、鞠智城を含む三城と、両櫛宮、両櫛の離宮しかないとということで、実際的には文献からはなかなか難しいということに気づきました。

それで、結局、この時期の国際的な危機をどのように感じていたのか、そしてもう一つは、繕治するのには命令しただけではできませんから、国内的に繕治するような状況がどれくらい整つていたかと、いう、ある意味では非常にオーソドックスなやり方で考えていかなければならぬということを感じています。

対外的な危機というと、八世紀の初頭まではもう少し続くのでしょうか。確か七一九年、養老三年に「備後国安那郡茨城、蘆田郡常城を停する」とあり、七一〇年代までそういうのが続きます。七〇〇年前後はもうひとつよく分かりませんが、今日も紹介しましたが、むしろ六九八年以降からいいますと、日本列島では南島の問題とか、薩摩・大隅の建国の問題のほうが多く史料に出てくるよう

になります。結局は、薩摩とか多額とか、最終的に大隅の国にに対する反乱も起るというわけです。

ですから、国際的という面を考えるとどうかという面もありますが、一つには、発掘調査の成果を見る限りでは、今日づいぶん話題になりましたこの字型配置の建物群や八角形建物の出現であるとか、一方、兵舎的なものが減るという報告もありますので、むしろ別の意味を持ってきたのではないか、というようにしか考えなかつたのですが。

そうなると、最初の築城の時に正史に記録が無い阿志岐城や、九州北部、特に福岡でも、歴史的史料に記録がない城をどう考えるかということになります。阿志岐城の場合には、『万葉集』に「蘆城」という名で歌が出てきますが。

それから、もう一つ考えていたのは、整備するということですが、ちょうど国分寺元遺跡から戸口の変動記録のような木簡が出土していて、そこに「兵士」という記載があります。『日本書紀』には、庚午年籍以降も、飛鳥淨御原令など思い



パネルディスカッション会場③

ますが、戸令に基づいて戸籍を作る際、やはり、「兵士」が区別されていたのではないかと思いますし、『日本書紀』の記述が正しければということになりますが、天武一二年や持統七年には、諸国に陣法博士を遣わして兵法を教習させるとの記載があるんですね。

実は、私は、日本の軍事制度というのは、白村江の戦いともう一つは壬申の乱と、二つの影響を受けて軍防令が構築されていると考えています。研究史を見ると、対外戦争のみで、国内的な条件を考えない方もいらっしゃいますが、私は両面あるものと思うんですね。ただ、諸国に陣法博士を遣わせるとありますから、軍団制度がはつきりしない段階では、これはやはり国宰とか、どういう人たちにやるのかということが、そこはもうひとつ分からぬのですが。

今日、森さんが言われましたように、どうも山城に関しては大宰や総領のほうがかなり力を持つているようですから、諸国に陣法博士を遣わして兵法を教習させ、それと同時に飛鳥淨御原令以降、戸令に基づいて戸籍が作られ、そこから兵士とか、正丁を徵発するシステムができてきましたので、かなり行政的に労働力編成が可能になりつつあるのではないかと思っています。逆に言いますと、私は、天智朝の時は、どういう形で、おそらく人夫と称する、壬申の乱の時もそうでしたが、それを徵集するのだろうと思いますが、ただ、潜在的には、例えば七世紀になつてから、やはり、古墳を造った技術とか、寺院を造る技術とか、いろいろな蓄積があり、それをどのように指導するかというので、しかも新たな朝鮮式山城ということですから、百濟の技術者がいなければできなかつたかというふうに

思います。そうなると、国際的危機が弱まるということが事実であれば、むしろ国内的な条件を重視したほうがよいのではないかと思っています。

ただ、繕治の内容は具体的には文献ではもう無理ですので、今日報告がありましたように、第Ⅱ期の考古学的な成果に基づいて、それを支えた技術労働力の変遷を考える必要があるうかと思います。ただ、八世紀に入りましたら、いろいろな考古の問題が分かるんですが、七世紀の後半が難しいですね。どのように技術労働力というのを維持していたのか。ただ、結果的に見れば、この三城が一〇世紀初めまで残つたわけですから、やはり大宰府にとつてだけでなく、当時の律令制国家にとつてはかなり重要な場所であつたことは間違いないと思います。

佐藤：　はい。ありがとうございます。

兵士の動員が戸籍の政策と同時に七世紀の後半に始まり得るというお話ですが、その場合は、やはり兵士を動員する主体というのは、国宰、後の国司になるのでしょうか、それとも地方豪族の評司みたいなもので、それを国司が統括するということなのでしょうか。

吉村：　白村江の戦いで、おそらく豪族、国造軍といわれていますが、そういう旧氏族体制で戦つて負けたわ

けですね。その後、おそらく「中国的な」といいますか、そういう官僚制的な軍事システムを作ろう

としたわけですが、ただ方針を出したからすぐにできるというわけではありませんし、今日も少し話題になつていましたが、奈良の平城京の一二門ですね。これは固有名詞ではなく「大伴門」とか、氏族の名称がついているわけです。ですから、奈良時代ごろになつても、ある氏族が主体となつて門を建設した、氏族だけかどうかは分かりませんが、かなり閥与しているということが分かります。七世纪後半の大宰府周辺、あるいは鞠智城に関しましても、旧豪族の力というのか、そういうものに依拠せざるを得ないと私は思います。

佐藤：矢野さんにお伺いしたいのですが、鞠智城の造営関係で、国内の郡レベルの地方豪族や人々の閥与を示すような遺構や遺物はないでしょうか。米の荷札は菊池郡の人が米俵を運んで来ていたことを示していると思うのですが。

矢野：そうした閥与を示すような遺物は、現在のところ、「秦人忍□五斗」銘の木簡だけです。他には思い当たません。

佐藤：今の議論の話の過程を受け止めていただいて、森さん、もう少し幅広くお話しただけないでどうか。

森

・吉村さんがおつしやった軍事制度の変換ということは、天武一四年だつたと思ひますから、その時に大型の兵器、それから式具を、郡家というか、評家にまず集めるという話があつて、それを受けて、持統朝に陣法博士を派遣するとか、諸国に射撃を練習するための所を作るとかという形で行われます。ですから、天武朝の最後くらいで、地方豪族が持つていた軍事指揮権みたいなものがある程度集中させて、さらに次には国宰とか、軍団を作るという一段構えで、大宝令で軍団制ができると、統一的な軍制が確立されます。ただそれが、単に対外戦だけを想定したのか、国内に対する軍事的な支配、統治も含めてなのかというのは、また別々にということですが、私はやはり国内支配も関係すると考えたほうがいいと思います。そういう過程もありながら、山城の修復ということだと思います。

私が今日のシンポジウムの課題を頂いた時に、「繕治」に関する短い記事でどうするんだということで、とりあえず大宝前後のいろいろな政策がどうなつてているのかということを、あらためて様々な記事を挙げました。その時、一つは、お話ししましたように、越後の蝦夷に対して、という記事がかなりあり、なおかつ、ちょうど磐舟櫓いわふねのきを修理するという記事があつて、それが出羽国の建設というふうにいきますことから、それと同時に、南方、南島関係の記事ですね。南島というのは、種子島についてはすでに推古朝くらいから出てくるとか、『隋書』の中の琉求伝というのがあつて、その琉球が沖縄なのか台湾なのかというはあるのですが、そこの鎧を見せたところ、六〇七、六〇八年に行つ

た遣隋使が、これは掖久（屋久島）の人たちが着てている鎧だとか言つてゐる記事があります。このように、推古朝ぐらいからもうすでに南島に対する目線というのがあつて、それが様々な形でつながりを持つていき、奈良時代以降も、南東から大宰府に対して物品が献上されるという形が維持されるわけですね。ですから、南の方の南島の支配とか、隼人に対する支配という記事もかなりあります。

それから、もちろん律令制を、律令制というか地方制度を確立していくための、様々な法律の仕組みだとか、税制に關するような記事ですね。あるいは国司の権限を強化するというような記事もあります。特に、文武二年あたりに各地方の鉱産物を調査するという記事があつて、けつこう地域の中まで国の力を及ぼそうというか、精査していくこうという流れがあります。その中にやはり北の方というと、日本海岸の出羽の方までの版図拡大ということと、南で言いますと、熊本県のさらに南の薩摩・大隅という、隼人の地ですね。そこをやはり律令国家の版図に組み込むということですね。それらはよくいわれてゐる、天皇を中心として、いわゆる東夷だとか南蛮だとかいう文明化が遅れた人たちがその支配に従つてゐるという、中国皇帝のいわゆる中華思想的な国家体制ですね。律令は結局中国の皇帝支配と関係しますから、当然律令に基づく国家を築いていくということは、やはりそのような支配構造というものもないといけないというか、それを作らなければいけない。

隼人に関しては、最近の隼人の研究では、いわゆる律令制下の日本人たちと全く別の生活をしていたというのは怪しいのではないかと。つまり、隼人というのは作られた差別意識ではないかという

ふうな研究もあるようですが、そういう中で、やはり北方と南方に版図を広げていくという、その流れの中に鞠智城の整備も考えられないかと思います。

それから、鞠智城の繕治の次の年、文武三年、六九九年にやはり「大宰府をして三野・稻積の二城を修せしむ。」という記事があり、これも、他の山城は大概なくなつていくなが、大宰府の版図の中では、やはり山城が整備されていくことになります。ただ、この三野・稻積がどこにあつたのか、吉村さんは確か薩摩の方と関係があるのでないかといふことで、南の方ではないかとおっしゃいましたが、大宰府の管理下にあるということで、さらに修理をしたということは、それ以前にこれはあつたということですから、やはり北の方にあつたとする見解もあります。場所が分からないと何とも言ひ難いのですが、鞠智城の繕治を含め、五つの城が整備されて、場所は北の方にあつたとしても、三野と稻積が鞠智城と同じように南の方との関係なのか、それとも大宰府を整備するとか、そういう記事と関係あるのか、これもまた文献史料ですとこれ以上の記事がなくて、後にも先にも出てこないということで、非常に困るわけですが、やはり大宰府の中で、この三つの城と二つの城が整備されているというのは非常に特異なことであり、その中に鞠智城が含まれているということですね。

鞠智城に関しては、やはり時期によつても違うのでしょうか、先ほど、国府がやられても鞠智城があるから、北にあるから大丈夫だというような話もあつたのですが、国府よりも北にあつて、大宰府と連携できる位置にありますから、その点からいうと、南の方に対する一つの拠点として、実際に軍

隊を送つて制圧するかは別にして、物資を蓄えたり、そういうような拠点を整備することは、南との関係でこの時期に進んでもいいのではないかと考えています。

佐藤

：ありがとうございました。律令国家が中央集権的な中国を真似た小中華帝国を目指す時に、北も南も意識したことですね。これは「国内的」というべきかまだ意見があると思いますが、隼人の人たち、蝦夷の人たちとの関係も出てくるということですね。

三野・稻積城については北九州説もあつて、新日本古典文学大系本の『続日本紀』では、三野城というものは、筑前国鳴郡、糸島半島の、伊都国の近くですけれども、そこにある地名もあるので、そこではないかといわれています。実を言うと、その鳴郡の大領、郡司は、肥君猪手といいまして、肥後の國の地方豪族が、郡司になつていっています。肥君というのは、先程、日羅という人が百濟の大臣格になつたという話がありましたが、博多湾に面した郡の郡司にまでなつてているという、対外関係の要衝を抑えているということもあると思います。

最後に、鞠智城の役割とその変化についてお話ししようと思つていたのですが、時間もございませんので、大変恐縮ですが、今日のこの議論を踏まえて、この四人のパネラーの先生方に、鞠智城をテーマとしてこれから古代史を考えるときにどういうことが課題となるか、どういう点が面白いか、今日のご感想でも結構ですので、矢野さんからおひとりずつお話しいただければと思います。

矢野

.. 本日のシンポジウムは、西暦六九八年の鞠智城の繕治の実像を探るということがテーマで行つております。文献も限られていますが、実は、発掘調査の成果も同じようなことが言えます。例えば、城門や土壘線などは、創建期に造られて以降、それを修理したとか、造り直したとか、そういうことが調査では明らかになつていません。大野城の中心の城門である大宰府口城門では、三期に及ぶ時期区分と変遷が明らかになつているのですが、そういうた痕跡は全くないので。この時期に、城内の施設は最も充実しますが、その周りの外郭施設については、今のところその時期に何をしたのか分かつていい状況です。

今後、鞠智城の繕治については、内容的にもさらなる検証が必要と思っていますので、本日のシンポジウムの内容を地元に持ち帰つて、よく吟味し、鞠智城研究の課題として挙げさせていただきながら、さらに鞠智城の実像が分かるように尽力していきたいと思いました。

佐藤

.. どうもありがとうございました。それでは、次に、森さんお願ひします。

森

.. 私は地方豪族の歴史も研究していますが、残念ながら、肥後国は郡司があまり分かりません。他へ行つて郡司になつた人、肥君は比較的大活躍しているのですが。ですから、先ほどの質疑応答の中

でも、鞠智城と現地との関係はないのかということで、例えば、素人的に言うと、土器が、菊池郡のものとか、熊本周辺のものとか、そういうものともし関わりが分かるのであれば、その郡司の動向が分かるのではないかと思いますから、是非そちらのほうは、在地の土器との関係がないのかどうか、教えていただきたいと思います。

「繕治」の後ということになると、鞠智城がもう一度文献に出てくるのは、九世紀の後半で、その時期は特に有明海方面もそうですし、博多の方もそうですが、新羅海賊の問題があります。新羅の国がだんだん終わっていく時期で、国が乱れて、生活できない人が海賊行為をするということもあるわけですね。そういう中で、鞠智城の記事ですか、鞠智城に限らず九州一帯については、新羅海賊が攻めてくるから兵庫が鳴るという話があつて、やはり防衛という面と深く関わってきますから、そういう九世紀の国際関係の中での鞠智城というのも重要なになります。

それから、全く時代は異なるのですが、鞠智城がある地は、中世の菊池氏という有力な武士団がいるところです。菊池氏は、もともと刀伊の入寇という、一〇一九年に朝鮮半島から刀伊という人たちが、一瞬ですけれども、九州北部を蹂躪するときがあつて、その時に活躍した藤原隆家の子孫とともにわされており、要は大宰府の官人になつた人が、菊池氏の祖先になつてゐるわけで、大宰府から肥後に土着するときにも、この地域は良い地域だと思うんですね。ですから、大宰府との関係がその後どうなつていくのかということも、興味深いのではないかと思いました。

佐藤：次に、小田さんお願ひします。

小田：「繕治」には大宰府が関わっているのは十分言えると思うのですが、「繕治」に至った根本的な理由といいますか、それが何だったのか、というのがありますと、例えば地震であるとか風水害であるとか、そういうしたものも一つ理由にならないのか、そうであれば、そいつた痕跡が遺跡の中から出てこないのか、地震の場合は、大野城・基肄城は近くですが、鞠智城は少し離れているという問題はあるかと思いますが、自然災害的なものも考えながら調査にあたる必要があるのではないかと少し思いました。

吉村：それでは、最後に、吉村さんお願ひします。

吉村：実は、今日、東北地方の問題に触れる時間がほとんど無かつたのですが、東北地方の対蝦夷政策といふのは、史料の出方は、対日本海側は先ほどありました渟足柵のようになりますが、太平洋側は出てこない。ただ、郡山遺跡というのが仙台にありますと、これがほぼ孝徳朝くらいですか、かなり『日本書記』に引っかけて解釈しているような面があると思いますが、七世紀半ばくらいになります。と

ころが、九州の場合は、全く史料に出てこなければ、まったく考古学に依拠しなければいけないので、少し出てくるのがややこしいところで、ただ逆に言うと、国分松元遺跡から出てきた木簡なんかを見てていきますと、この時期、本当に律令制国家の形成の途次であるし、大宰制、のちの筑紫大宰府ですが、筑紫大宰がどうなるのか、国司制度がどう変化するのか、戸籍が編成されて兵士制度・軍団制度がどのように整備されるのか、かなり総合的な問題があるということで、あらためて面白いと、いうか、研究に必要だと思いました。

もう一つ、弁解ではないのですが、私自身『続日本紀』を読むときは、一応私も事務局長をやつた、新日本古典文学大系の『続日本紀』をまず見ることにしてるんですが、どうも一〇〇%正しいということにはならないところもありまして、その時の考古学的な発掘調査の成果などが偏っているとか、あるいはまだ分かつていないと、そういうこともあります。

実は、今回も三野・稻積というのをどうするかということですね。かつては井上辰雄さんとか中村明藏さんが言つておられるのですが、もし北の方にあるのだつたら、文武二年に一体として修理をしてもおかしくないのではないかと。そこが違うのはどういうことなのかということで、三野城の場合には日向国の近くに地名が設定されているようですし、稻積の場合も大隅に設定されていますが、この時期はまだ大隅国が建国されていないので、日向と考えられているようですが、まだ不十分なところがあるかと思います。東北の官衙型城柵というのと、西日本の朝鮮式山城と、九州

南部に関してはどうも違った様相を見せてきていますし、どちらに入るかと悩むよりは、むしろ、第三番目のカテゴリを作つて考えたほうが役に立つというか、考えやすいのではないかと思います。結局、私自身、そういうような結論、仮説に至つたのは事実なんですが。

ただ、まだ分からぬことが多い、私自身も発表するとなると、ある程度責任あるものをお話しそうと思うと悩むことも多いし、逆に認識がかなり進んだということもありましたが、まったくないわけではないので、なんとか今後の出土資料に期待して、知事さんも言っておられましたが、やはりロマンを求めるとなかなか面白くない。結論が出ると、邪馬台国論争ではありませんが、あまり議論しても意味がないわけですね。あれはなかなか難しいのですが、そういった意味で今後もっと深めていけば、非常に面白いというか、古代史を解明する上で、絶好の素材を提供するのではないかと思つています。シンポジウムの準備をするにあたりそういう感想を持ちました。

佐藤：ありがとうございます。西日本の山城や東北の城柵とは違う、「九州官衙型城柵」という新しい提示をしていただきましてありがとうございました。

律令制をめぐる様々な動向を総合的に考えていくこうという際に、鞠智城が非常に重要な題材になるということが、今日のシンポジウムでも分かつたと思います。これについてはこれから調査・研究、

特に文字資料などがあればそれによって、さらに鞠智城の歴史的意義が明らかになっていくことを期待したいと思います。

これでパネルディスカッションを終わらせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

した。